河南町文化財調査報告書第２集

須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書

昭和62年度

昭和63年3月

河南町教育委員会

須江関ノ入遺跡群
（すえせきのいり）

序

近頃の世の中は、簡単に山や丘を崩したり、壊したりは出来ない世の中である。

山や丘と言えども歴史があり、人間の生活の跡があると言うわけである。いわゆる遺跡、遺物、文化財であり、文化財は大切にし、保存されなければならないというわけである。

東側の一部が石巻に属する東西1.3㎞、南北0.9㎞、面積にして約91㎢ の標高60ｍほどの丘陵地は、河南町須江の通称須江山と言われ頂上附近に登れば東南に石巻市、矢本町の繁華街、そして遠く太平洋の波が望見される景勝の地でもある。

又、金売吉治が住んだと伝えられる長者館（長者平と言う処もあり）（のち藩政期小島嘉右ェ門の除屋敷跡とも）があり、いつの時代かハッキリしないが代官が住んだらしく、代官山の別称もあり、全山粘土質のところから古くから〝焼きもの〟も行なわれたらしく、窯跡や焼物の破片が諸々方々から見つけられるなど、文化財の遺跡包含地として知られていた。その地が河南町須江字関ノ入地区である。

河南町の発展計画に関ノ入開発計画があり、工業団地、住宅団地、その他の用地として開発されることになったので、それの事前作業として文化財詳細分布調査の対象地となったのである。昭和62年度の文部省及び文化庁の補助事業として実施されたのがこの報告書の中味である。

前年の昭和61年度、統合中学校の建設の事前作業として須江糠塚遺跡の発掘調査があったが、今後の文化財行政の進展とにらみ合せ本町にも文化財担当の専門職員の必要性を感じて昭和62年度から専門職員を採用配置した。その職員の最初の仕事がこの詳細分布調査の仕事でありそのまとめがこの報告書である。従ってベテランから見れば不足、不備が多く見られるかも知れないが、職員は渾身の努力をつくした調査であり報告書である。その点考慮されてご覧いただきたい。最後になり恐縮だがこの調査に作業員として協力していただいた地元のみなさんに厚く御礼申し上げます。更に関係者のみなさん、特に先進地にあってこの種、調査、報告書作製にいくたの経験をもつ先輩、指導者の各位に、今後の当町文化財行政について忌憚、そしておしみない御指導御弁韃賜るようお願い申し上げ序文とする。

昭 和 63 年 3 月

河南町教育長

浅　野　鐵　雄

目　　次

序

Ⅰ　調査に至る経過……2

Ⅱ　遺跡の位置と環境……4

Ⅲ　調査の方法と経過……8

Ⅳ　基本層位……9
　1.Ａ区…9　2.Ｃ区…10　3.Ｄ区…10

Ⅴ　発見された遺構と遺物……11
　1.Ａ区…11　2.Ｃ区…13　3.Ｄ区…16

Ⅵ　まとめ……19

〔引用・参考文献〕

■図版目次

第１図　周辺の遺跡……3
第２図　遺跡範囲……6
第３図　Ａ区基本層位断面図……9
第４図　Ｃ区基本層位断面図……10
第５図　Ｄ区基本層位断面図……10
第６図　Ａ区ＳＩ－２出土遺物……11
第７図　Ａ区出土遺物……11
第８図　Ａ区遺物拓影……12
第９図　Ａ区検出遺構……13
第10図　Ｃ区検出遺構……14
第11図　Ｃ区ＳＫ－６出土遺物……15
第12図　Ｃ区ＳＫ－１出土遺物……15
第13図　Ｄ区検出遺構……16
第14図　Ｄ区出土遺物……16
第15図　Ａ区遺物分布図……17
第16図　Ｃ区・Ｄ区遺物分布図……18
第17図　Ａ区遺構分布図
第18図　Ｃ区・Ｄ区遺構分布図

■写真目次

①関ノ入地区遠景……22
②Ａ区調査状況……22
③Ｃ区全景……22
④Ａ区１号住居確認面……23
⑤Ａ区11号焼土遺構検出状況……23
⑥Ａ区２号住居確認面……23
⑦Ａ区１号窯跡確認面……23
⑧Ｃ区１号土壙検出状況……24
⑨Ｃ区２号土壙検出状況……24
⑩Ｃ区４号土壙検出状況……24
⑪Ｃ区１号焼土遺構検出状況……24
⑫Ａ区縄文土器片……25
⑬Ａ区２号住居出土土師器坏……26
⑭Ａ区２号住居出土土師器坏内籾痕……26
⑮Ｃ区１号土壙出土土師器底部……26
⑯Ｃ区６号土壙出土中世陶器片……27
⑰関ノ入地区出土石器……27

例　　言

1．本書は、昭和62年度国庫補助事業として実施した関ノ入地区遺跡群の詳細分布調査の内容を収録した報告書である。

2．本事業は河南町教育委員会が担当し、宮城県教育庁文化財保護課の協力をいただいた。

3．土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を利用した。

4．本書を作成するに当り、整理・執筆・編集は、主事中野裕平が担当した。

5．報告書の作成において、下記の方々・機関から助言・協力を賜った。

宮城県教育庁文化財保護課、平沢英二郎（広渕小学校教頭）、高倉敏明、千葉孝弥、石川俊英、相沢清利（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、佐藤友之

6．調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は、河南町教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺 跡 の 名 称：関ノ入遺跡群（須江瓦山窯跡Ｂ、茄子川上遺跡、関ノ入遺跡）

遺 跡 所 在 地：宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川

調　査　主　体：河南町教育委員会

調　　査　　員：河南町教育委員会社会教育課　主事中野裕平

宮城県教育庁文化財保護課　技師阿部博志

調　査　指　導：宮城県教育庁文化財保護課

調査・整理協力：宮城県教育庁文化財保護課

（地権者）関ノ入土地区画整理組合

（調査参加者）亀山幸之烝、亀山信子、今野はな子、佐藤公雄、佐藤定、佐藤次雄、佐藤和子、渋谷清六

（整理参加者）今野はな子、佐藤和子

調　査　期　間：昭和62年８月19日～昭和62年12月17日

調査対象面積：91,033㎡（発掘面積　19,164㎡）

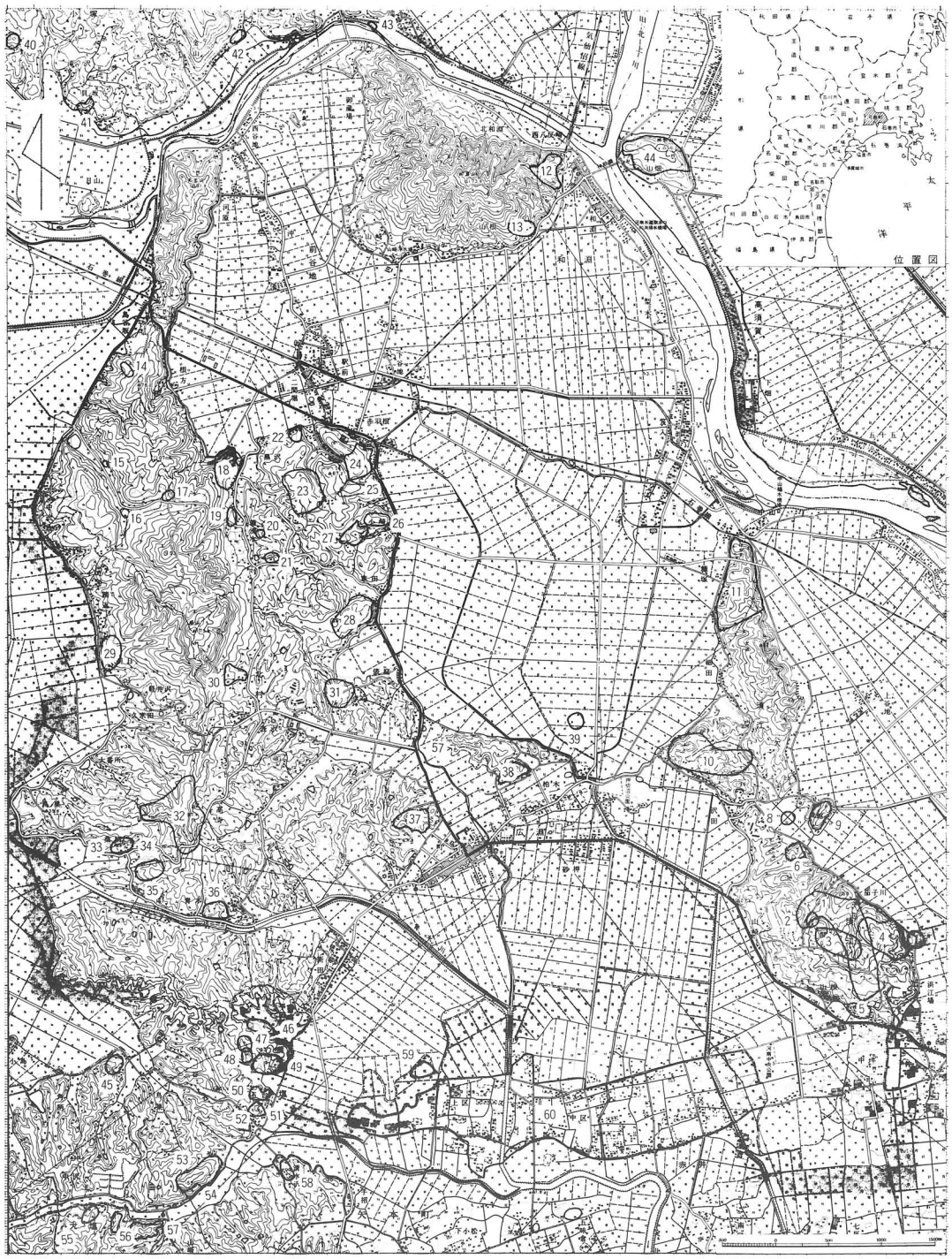
Ⅰ．調査に至る経過

関ノ入地区は河南町の東南端の丘陵部にある。石巻市近郊に当り、これまで民間業者等による農用地等を転用しての小規模開発や丘陵部の土取り、また石巻地方広域水道企業団による須江山浄水場の建設が行われるなど、開発によるスプロール化が進行している。さらに今後も石巻専修大学の建設・開校を含め、石巻市の都市計画による関連開発の影響が十分に考えられ、行政対応が難しい地域となっている。また市街化区域編入が予想される（昭和62年10月編入）地域でもある。この関ノ入地区に個々別々に押し寄せる開発の波を消極的に受け止めるのでなく、積極的に受け止め、調整を図る計画がもち上がった。

関ノ入地区開発計画（以下「開発計画」）は、桃生郡河南町須江字関ノ入及び茄子川地内に、河南町による工業団地、関ノ入土地区画整理組合による住宅団地造成を行うものである。

昭和61年３月、町当局から開発計画の通知を受けた河南町教育委員会は、その開発予定区域内に『宮城県遺跡地図』、『宮城県遺跡地名表』登載の須江瓦山窯跡Ｂ、関ノ入遺跡、茄子川上遺跡が含まれることより、直ちに協議に入った。同年８月、県文化財保護課の指導と協力を得て、本地域の分布調査を行い、６地点で遺物採取、遺構確認をした。

しかるに、開発区域が広範に亘ること、遺跡の詳細な分布の確認が行われていないことより、開発が行われる以前に遺跡群の分布や性格を把握し、遺跡の保護・保存を図るため、河南町教育委員会は、昭和62年度の国庫補助金の交付を得て、詳細分布調査を実施することとなった。調査は、用地の関係で８月に開始した。用地交渉への影響を考慮し、用地内への立ち入りは制限を受け、事前の踏査は十分なものとならなかった。調査開始後も未解放の地点や伐採未了の地点があったが、調査の結果、遺構・遺物とも予想を下回ることが判った。遺跡の広がりと遺構分布の密度のおおよそが把握されたので、12月中旬に野外調査を終え、室内整理作業に入った。



第1図　周辺の遺跡

II．遺跡の位置と環境

遺　跡　地　名　表

No.	遺　跡　名	時　代
	河　南　町	
1	須江瓦山窯跡B	平安
2	茄子川上遺跡	奈良・平安
3	関ノ入遺跡	奈良・平安
4	長者館跡(長者平遺跡)	中世
5	宿屋敷跡	中世
6	代官山遺跡	奈良・平安
8	池袋囲遺跡	——
9	塩野田城跡(塩煮田城)	中世
10	須江瓦山窯跡A	平安
11	須江糠塚遺跡	縄文(中)・古墳(前)・奈良・平安・中世
12	要害館跡(館山館)	中世
13	武田館跡(武田屋敷)	中世・近世
14	高森山遺跡	古墳・奈良・平安
15	大沢A遺跡	縄文・奈良・平安
16	大沢C遺跡	奈良・平安
17	大沢B遺跡	縄文
18	小友遺跡	奈良・平安
19	箱清水寺脇遺跡	縄文
20	箱清水A遺跡	縄文(後)
21	箱清水B遺跡	縄文・奈良・平安
22	黒沢A遺跡	縄文・奈良・平安
23	宝ヶ峯遺跡	縄文(後・晩)
24	前山遺跡	縄文・奈良・平安
25	大田沢遺跡	縄文・奈良・平安
26	小崎館跡	近世
27	小崎遺跡	縄文・奈良・平安
28	草田館跡	——
29	朝日貝塚	縄文(中)
30	喜多村館跡(高地谷館)	中世
31	俵庭遺跡	縄文(中・後)・奈良・平安
32	新庄館跡(駒立館)	中世
33	桑柄貝塚	縄文(前)
34	桑柄遺跡	奈良・平安
35	青木館跡(林光館)	中世
36	駒場館跡	——
37	夷田館跡	近世
38	柏木館跡	——
39	広渕沼遺跡	——
	石　巻　市	
7	新山崎遺跡	古墳(前)・平安
	涌　谷　町	
40	中野遺跡	古墳(後)・奈良・平安
41	貝坂貝塚	縄文(前・中)
42	笠石貝塚	縄文(前・中)
43	御蔵場貝塚	縄文(前)
	桃　生　町	
44	神取山遺跡(揖取山城)	中世
	矢　本　町	
45	餅田貝塚	縄文(前)
46	平田原貝塚	縄文(前・後)
47	国見台遺跡	奈良・平安
48	国見沢遺跡	奈良・平安
49	前峰遺跡	奈良・平安
50	加武喜遺跡	中世
51	浜江場遺跡	縄文・奈良・平安・近世
52	五台遺跡	縄文(早・前)
53	樋ノ口館跡	中世
54	一杯清水遺跡	奈良・平安
55	隆泉寺跡	中世・近世
56	僧坊跡	中世
57	鈴ヶ原館跡	中世
58	清水沢遺跡	古墳(後)・奈良・平安
59	東照井遺跡	古墳(後)
60	赤井遺跡	弥生・奈良・平安
61	二入館	中世
62	小脇浦遺跡	古墳(後)・奈良・平安

関ノ入地区は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入及び茄子川地内に所在し、ＪＲ石巻線佳景山駅の南方約 3.5kmにある。遺跡の所在する河南町は宮城県の東部に位置し、石巻市の北西に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川と合流して石巻湾に注いでおり、その南側の平坦地となだらかな丘陵地が町域を形成している。

東に標高60～65ｍの通称須江丘陵、西に筧岳丘陵から続く標高70～ 170ｍの通称旭山丘陵、北に最高所 173ｍの和渕山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、江戸時代には用水確保のため広渕沼が造られたが、大正10年から昭和３年にかけて干拓され水田地帯となっている。

須江丘陵は、小竹地区を挾んで大きく南北に二分される。調査対象区域は、丘陵南部のほ

ぼ中央の頂部及び斜面に立地しており、頂部の標高は60～65ｍである。現況の大部分は杉や雑木の山林で、他に僅かの畑地がある。

本遺跡群の周囲にも多数の遺跡が発見されている。須江丘陵の北端にある須江糠塚遺跡は、縄文時代中期から古墳時代前期、奈良・平安時代、中世に至る複合遺跡であり（高橋守克、阿部恵：1987）、須江瓦山窯跡Ａには大規模な窯跡群がある。

さらに周辺部に目を移すと次のようになる。

町内には旧石器時代の遺跡の発見は知られていない。

縄文時代の遺跡としては、縄文後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的にも著名な宝ヶ峯遺跡がある（伊東信雄：1957、松本彦七郎：1919－ａ、1919－ｂ）。他に朝日貝塚、桑柄貝塚、小崎遺跡、俵庭遺跡などがあり、これらは旭山丘陵とその麓部で平坦地と接する縁辺にある。

弥生時代の遺跡としては本鹿又遺跡、古墳時代の遺跡としては須江糠塚遺跡、高森山遺跡がある。また、広渕新田の丘陵部に古式土師器の出土地があることが知られている(註)。

奈良・平安時代の遺跡としては前述の須江糠塚遺跡、須江瓦山窯跡Ａのほか、代官山遺跡、高森山遺跡、俵庭遺跡などがある。

中世以降には、旭山や須江の丘陵上などに多くの城館が築造され（館数14）、本遺跡群の周辺では金売吉次の仮屋敷跡（藩政期には小島嘉右エ門の除屋敷跡と言われる）とされる長者館跡があり、須藤勘解由左衛門が館主とされる糠塚館跡（須江糠塚遺跡）や塩野田城(館)跡がある。

（註）広渕小学校教頭平沢英二郎氏の御教示による。なお、遺物は町教委が保管している。

第2図 遺跡範囲

Ⅲ．調査の方法と経過

今回の詳細分布調査は、関ノ入地区開発区域内に、『宮城県遺跡地図』ならびに『宮城県遺跡地名表』登載の周知の遺跡である須江瓦山窯跡Ｂ、茄子川上遺跡、関ノ入遺跡が所在するため、遺跡の立地している丘陵頂部及び斜面を対象に行ったものである。

地区設定：前年度に県文化財保護課の協力によって行った分布調査によって、遺物を表面採取した地点を中心に、３地区を設定した。西からＡ区、Ｄ区、Ｃ区と名付けた（当初Ｂ区として予定した地域は、地権者の同意を得られず設定できなかった）。国家座標Ｘ＝＋36.0 Ｙ＝－170.0 を原点とし、調査区域全体に基準杭を30ｍごとに、グリッドは３ｍ単位に設定した。グリッド表記は、東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で行い、両者を組み合わせて呼ぶことにした。したがって、基準杭Ａの南東グリッドの名称はＪＡ－500である。

調査方法：前年度の分布調査並びに事前の踏査により、Ａ区東側斜面、Ｃ区北側緩斜面等において土師器及び須恵器の破片が表面採取されており、これらの地点を中心に関連遺構の有無を明らかにし、遺跡の範囲、時代、性格を明らかにすることを目的として調査を行った。調査範囲が広範に亘り、且つ現況が杉、雑木の山林である所が多いため、抜根の労力を考慮した上で、表土除去には重機を用いた。

調査の経過：詳細分布調査は、昭和62年８月19日から開始した。Ａ区、Ｃ区、Ｄ区の順で行った。

①Ａ区（対象面積：54,500㎡　発掘面積：12,492㎡）

最初に、丘陵頂部及び斜面に調査グリッドを設定するための杭打ちを行った。但し、西側斜面では伐採が終了していなかったため、この部分の杭打ちについては、伐採終了後に行った。南側斜面からトレンチ法によって表土除去を開始し、時計の逆回り方向で調査を進めていった。南東斜面からは第１～第４号住居跡、第１～第５号焼土遺構が、東斜面からは第６～第10号焼土遺構が、北東斜面からは第１号窯跡が発見された。頂部では第11、第12号焼土遺構が検出された。また頂部から南東斜面にかけて、縄文時代前期の遺物の散布が認められた。なお、西側斜面（ＦＭ－560、ＨＴ－508）を結ぶラインの西側では、宅地造成計画などによる削平を受けていることが、坪掘りと聞き込みで明らかだったので、トレンチを入れなかった。

②Ｃ区（対象面積：17,624㎡　発掘面積：3,078㎡）

調査グリッドを設定するための杭打ちを行ったのち、南側斜面からトレンチ法で表土除去を開始し、調査を進めていった。南側斜面からは第１号焼土遺構を検出し、北側緩斜面からは、第１号竪穴状遺構、第１～第６号土壙、第１～第５号溝を発見した。

③D区（対象面積：18,909m²　発掘面積：3,594m²）

杭打ちを行ったのち、南東斜面からトレンチ法で表土除去を開始し、頂部、北斜面、西斜面の順に調査を進めた。焼土遺構１基、溝（旧沢跡）１条を発見している。

工　程　表

	8　月	9　月	10　月	11　月	12　月	1　月	2　月
器材運搬	A区		C区				
地区設定	A区		C区	D区			
表土排土		A区	C区	C区 D区			
遺構検出			A区C区	C区	D区		
実測・写真			A区C区	A区 C区	D区		
埋め戻し					C区 A区 D区		
遺物整理							
図面・写真整理							
報告書の作成							

Ⅳ．基　本　層　位

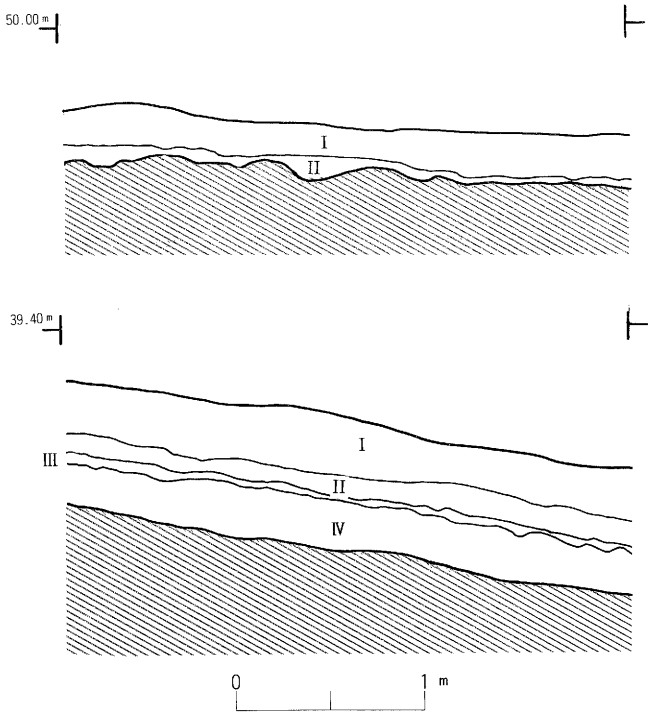
１．Ａ区

南東斜面下部では４層に、他では１～２層に分かれる。

〔第Ⅰ層〕　10ＹＲ4/4褐色のシルトである。南東斜面、南斜面に分布する作土である。南斜面では、本層のみが分布する。

〔第Ⅱ層〕　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色のシルトである。Ａ区のほぼ全体に分布する層である（頂部では10ＹＲ5/3）。厚さ５～30cmである。

〔第Ⅲ層〕　10ＹＲ3/3暗褐色の粘土質シルトである。北西



第３図　Ａ区基本層位断面図

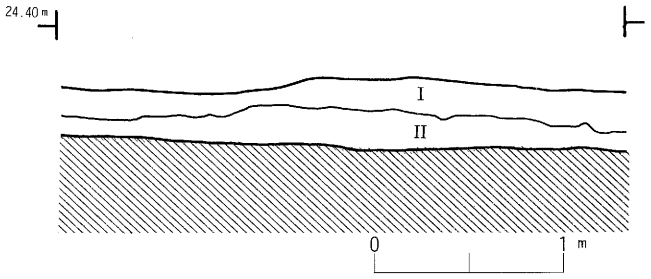
斜面の一部と東側斜面の下部に広がる層で、厚さ５～20cmである。

〔第Ⅳ層〕　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色のシルトである。東側斜面の下部に広がる層で、厚さ15～45cmである。本層上面まで土師器片を含んでいる。

２．Ｃ区

南側では１層、北側では２層に分かれる。

〔第Ⅰ層〕　10ＹＲ5/4にぶい黄褐色のシルトである。Ｃ区全体に広がる層で、厚さ10～25cmである。遺構は全て本層を剥いだ時点で確認された。



第４図　Ｃ区基本層位断面図

〔第Ⅱ層〕　10ＹＲ5/6黄褐色の砂質シルトである。Ｃ区北側緩斜面に認められる層で、厚さ10～20cmである。

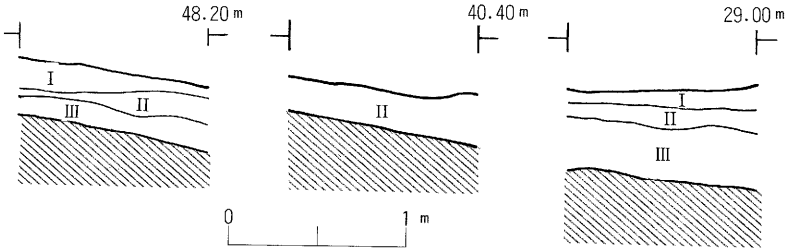
３．Ｄ区

斜面上部で２～３層、下部では３層に分かれる。

〔第Ⅰ層〕　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色の粘土質シルトである。斜面上部及び北側緩斜面に認められる層で、厚さ５～15cmである。

〔第Ⅱ層〕　10ＹＲ5/4にぶい黄褐色のシルトである。Ｄ区全体に広がる層で、厚さ10～20cmである。遺構は本層を剥いだ時点で確認された。

〔第Ⅲ層〕　10ＹＲ6/4にぶい黄橙色の粘土である。ほぼＤ区全体に広がる層で、厚さ25～30cmである。北側緩斜面では、部分的に本層の中程にマンガン粒を含む。遺物は本層の上面から出土している。



第５図　Ｄ区基本層位断面図

Ⅴ．発見された遺構と遺物

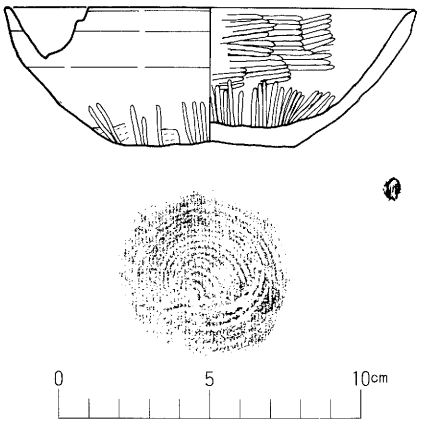
１．Ａ区

発見された遺構は、竪穴住居跡４軒、窯跡１基、焼土遺構12基である。これらの遺構の多くは東側斜面から発見されている。遺構は地山面で確認されている。住居跡は全て南東斜面から確認されている。この中で、第２号住居跡は灰白火山灰を第１層に含み、第３号住居跡と切り合い関係にある。窯跡は北東斜面に１基のみ確認されている。さらにこの両側の表土を除去したが、窯跡は発見されなかった。焼土遺構は、頂部から東側斜面にかけて点在し、次のように分けられる。

溝状（窯状）―２基　　円形・灰白―２基　　不明―３基

長方形・灰白―３基　　円形・非灰白―２基

遺物は南東斜面、北東斜面から出土している。また頂部からも僅かに出土している。南東斜面では土師器･須恵器が大部分で､他に縄文前期の土器片が僅かに出土している。北東斜面の遺物は第１号窯跡からの遺物であり、須恵器のみが出土している。また頂部では、縄文前期の土器片、石器(石核)が各１点ずつ出土している。石器の素材は頁岩である。

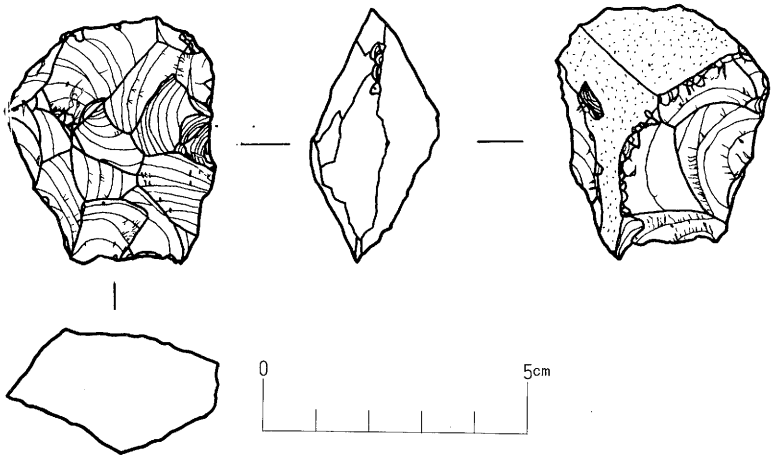


第６図　Ａ区ＳＩ－２出土遺物

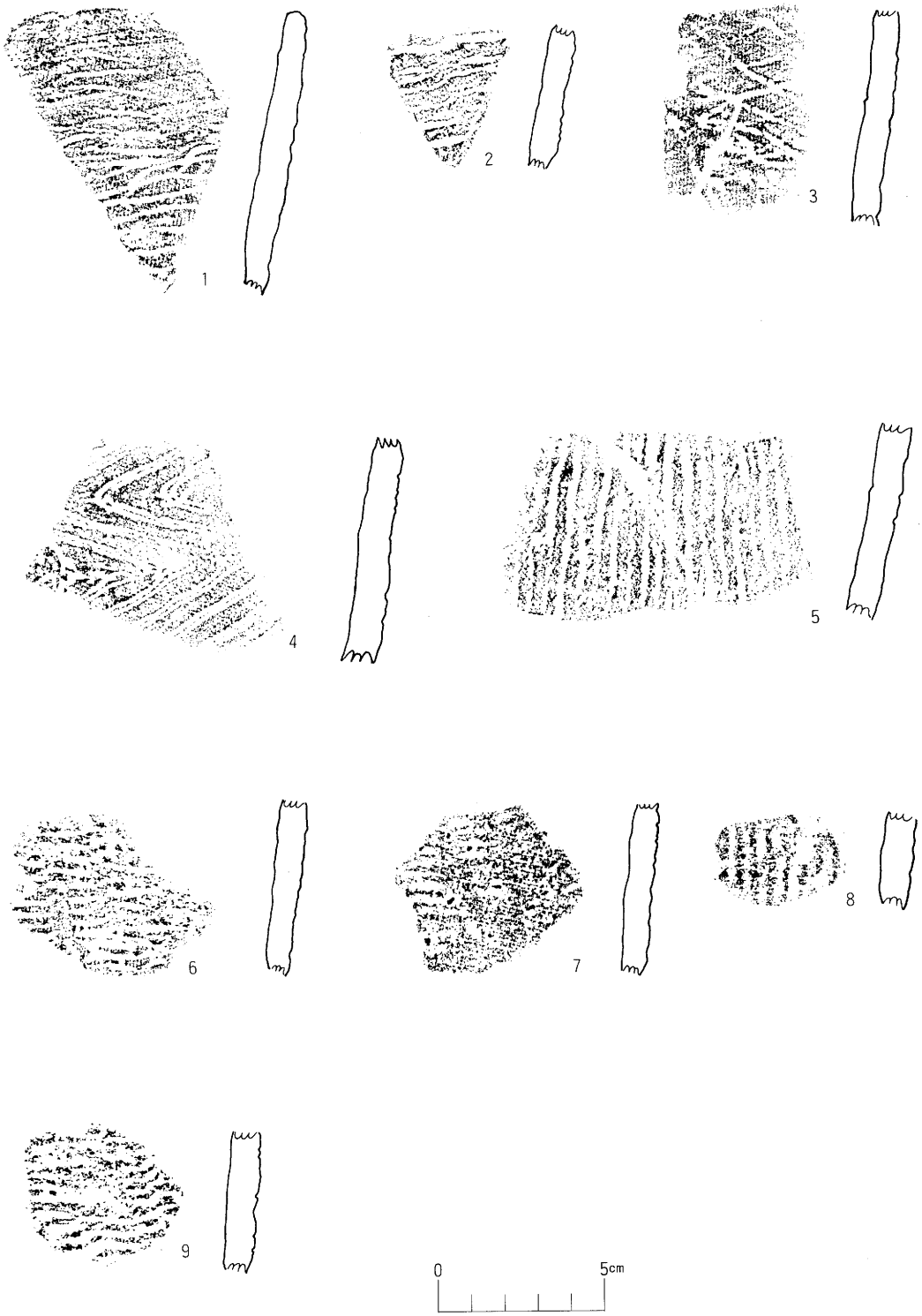
◦検出した遺構

(1)第11号焼土遺構

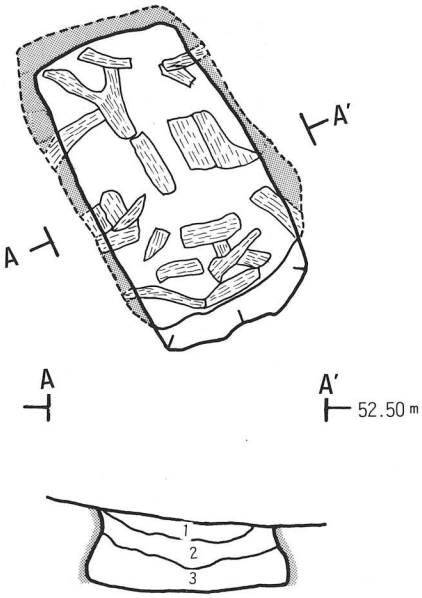
ＩＨ・ＩＩ－539 グリッドにおいて確認された。



第７図　Ａ区出土遺物

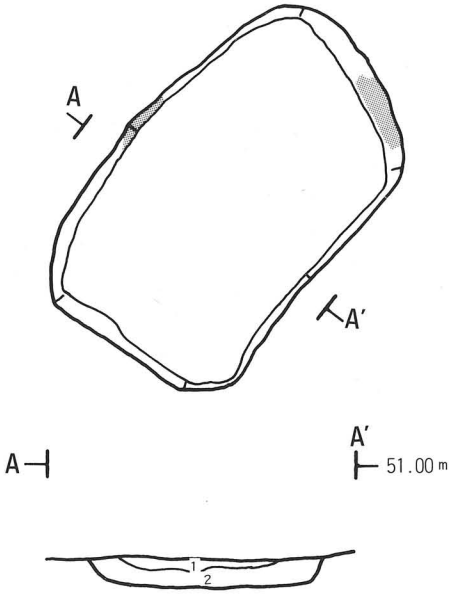


第８図　Ａ区出土遺物拓影



A区　第11号焼土遺構

		土　色	土性	備　　考
1	10Y R4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白火山灰、炭化物を含む。
2	10Y R3/3	暗褐色	シルト	焼土粒、炭化物、地山粒を含む。
3	N1.5/	黒　色	シルト	木炭層・地山崩壊ブロックを含む。



A区　第12号焼土遺構

		土　色	土性	備　　考
1	10Y R3/3	暗褐色	シルト	炭火物、焼土粒、地山粒を含む。 灰白火山灰を僅かに含む。
2	N1.5/	黒　色	シルト	木炭層・地山崩壊ブロックを含む。

第９図　A区検出遺構

平面形は長方形で、長軸 134cm、短軸72cm、深さ37cmの規模である。南側の短辺を除く他の三辺は、底面の方が広いフラスコ状となっており、その壁面が赤褐色に焼けている。また、最下層は木炭層となっており、割合に遺存状態が良かった。第１層には灰白火山灰を含んでいる。

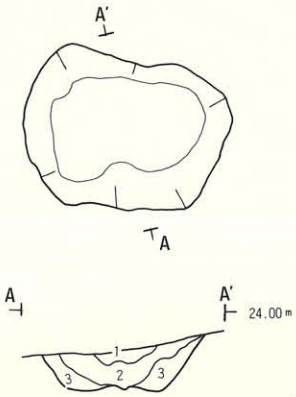
(2)第12号焼土遺構

ＩＧ・ＩＨ—547・548グリッドにおいて確認された。平面形は長方形で、長軸 160cm、短軸96cm、深さ13cmの規模である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、その一部が赤褐色に焼けている。灰白火山灰を第１層に僅かに含んでいる。

２．Ｃ区

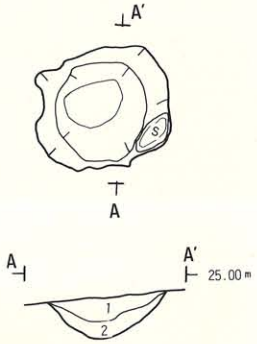
発見された遺構は、竪穴状遺構１基、土壙（ＳＫ）６基、焼土遺構１基、溝５条である。これらの遺構の中で、焼土遺構を除いては全て北側緩斜面にある。

遺物は、北側緩斜面でのみ出土している。ほとんどが土師器と須恵器であり、この他の遺物としては、ＳＫ－６より出土した中世陶器片、石器（石核）が各１点ずつある。石器の素材は頁岩である。



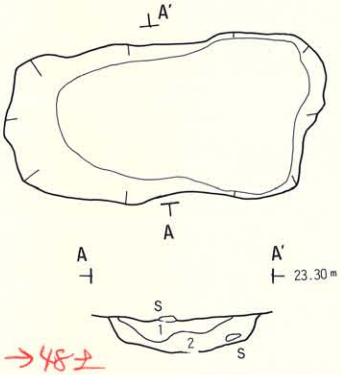
C区　ＳＫ－１ →71土

		土　色	土　性	備　　考
1	10Ｙ R3/3	暗褐色	シルト	炭化物を含む。
2	10Ｙ R4/4	褐　色	シルト	10Ｙ R5/6黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含む。礫(５～30mm)、炭化物を含む。
3	10Ｙ R6/4	にぶい黄橙色	シルト質粘土	粗砂を含む。壁面崩壊土。



C区　ＳＫ－２ →54土

		土　色	土　性	備　　考
1	10Ｙ R4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	礫(10～50mm)を含む。
2	10Ｙ R5/4	にぶい黄褐色	シルト	地山崩壊粒、礫(10～50mm)を含む。

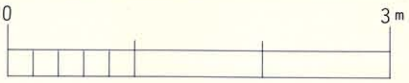


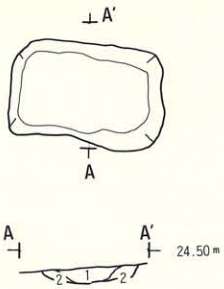
C区　ＳＫ－４ →48土

		土　色	土　性	備　　考
1	10Ｙ R3/3	暗褐色	シルト	礫(5～200mm)を多く含む。特に10mm前後のものが多い。炭化物を含む。
2	10Ｙ R4/4	褐　色	シルト	地山崩壊ブロックを含む。礫(5～70mm)を含む。特に10mm前後のものが多い。

C区　第１号焼土遺構

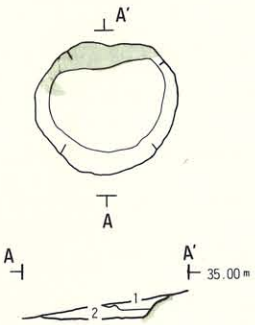
		土　色	土　性	備　　考
1	10Ｙ R4/4	褐　色	シルト	礫(5～15mm)、炭化物を含む。
2	10Ｙ R3/3	暗褐色	粘土質シルト	礫(5～20mm)、炭化物、焼土粒を含む。



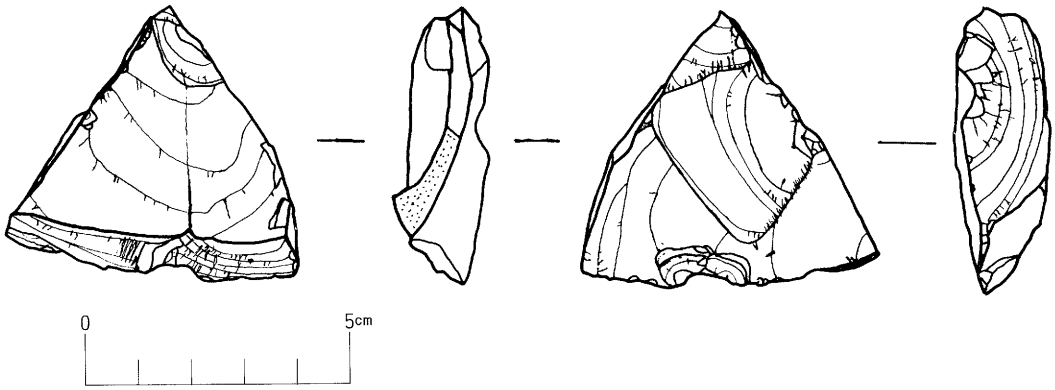


C区　ＳＫ－５ →38土

		土　色	土　性	備　　考
1	10Ｙ R3/3	暗褐色	シルト	細砂、炭化物を含む。
2	10Ｙ R5/6	黄褐色	粘土質シルト	



第10図　Ｃ区検出遺構



第11図　Ｃ区ＳＫ－６出土遺物

◦検出された遺構とその遺物

(1)ＳＫ－１

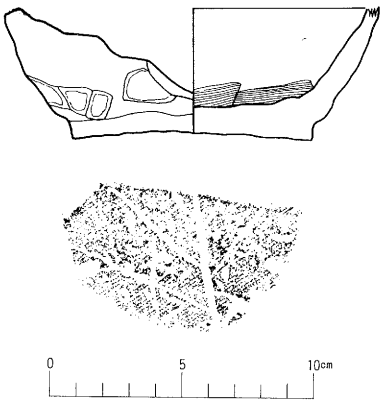
確認地点はＱＧ－535 である。平面形は楕円形で、長軸160cm、短軸116cm、深さ45cmの規模である。底面は中心に向かってやや盛り上がりを呈し、壁は緩やかに立ち上がる。第１層からは須恵器片・土師器片が、第２層からは底部に木葉痕をもつ土師器甕の破片が出土している。

(2)ＳＫ－２

確認地点はＱＤ－532 である。平面形は円形で、径 100cm、深さ39cmの規模である。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。

(3)ＳＫ－４

確認地点はＱＢ－538・539である。平面形は楕円形で、長軸250cm、短軸122cm、深さ32cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。第１層から土師器片、須恵器片が各１点ずつ出土している。須恵器片は蓋である。



第12図　Ｃ区ＳＫ－１出土遺物

(4)ＳＫ－５

確認地点はＰＮ・ＰＯ－534 である。平面形は長方形で、長軸 122cm、短軸80cm、深さ16cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。第１層、第２層から須恵器片が出土している。

(5)第１号焼土遺構

確認地点はＰＲ－510 である。平面形は円形で、径110 cm、深さ18cmの規模である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。壁面の南側及び底面の一部が赤褐色に焼けている。

土　器　観　察　表

	種　類	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面　調　整	内面調整	備　考
1	土師器坏	A区ＳＩ－２	13.6	5.7	4.6	上：ロクロナデ　下：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転糸切り
2	土師器甕	C区ＳＫ－１１層	－	8.0	－	ナデ	ヘラナデ	底部木葉痕

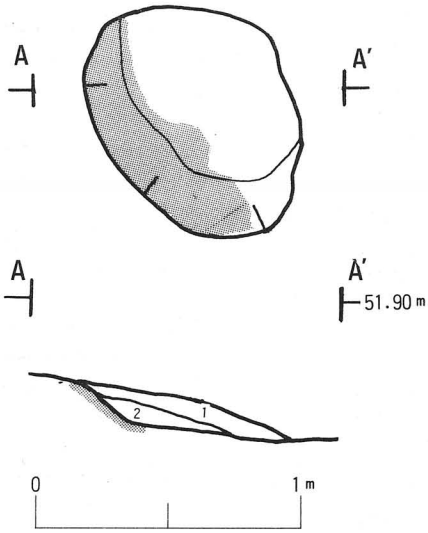
３．Ｄ区

発見された遺構は、焼土遺構１基、溝１条である。このうち溝は旧沢跡と考えられる。遺物は僅かに出土しており（有舌尖頭器、石鏃、土師器、須恵器各１点ずつ）、いずれも遺構と係わりをもたない。

◦検出された遺構

・第１号焼土遺構

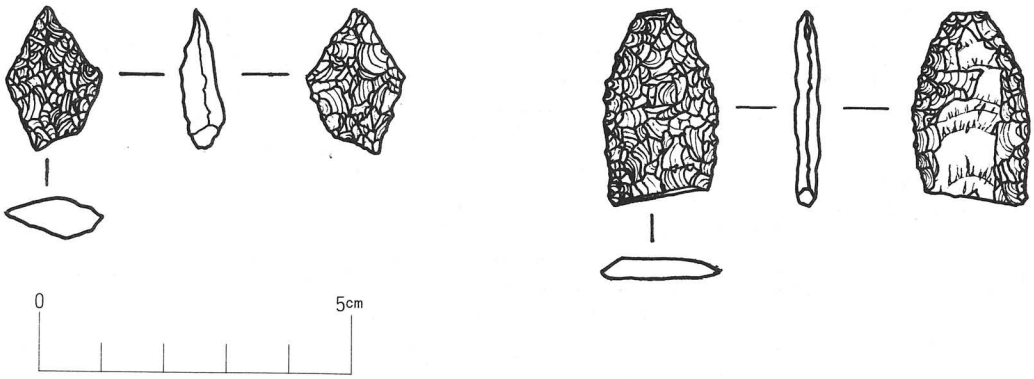
確認地点はＰＣ－485 である。平面形は円形で、径85cm、深さ25cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。壁面の西側及び底面の一部が赤褐色に焼けている。



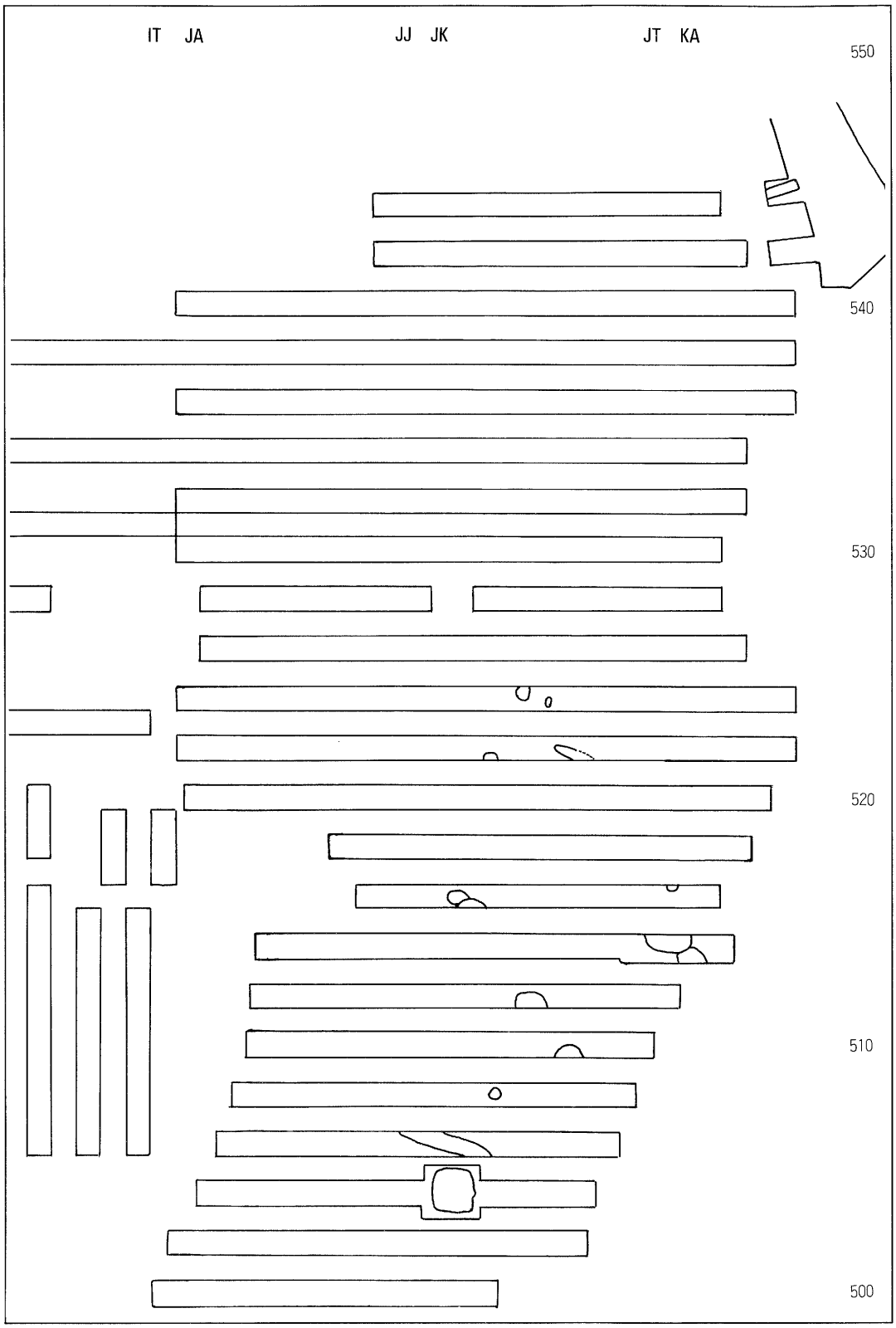
Ｄ区　第１号焼土遺構

		土　色	土　性	備　考
1	10ＹＲ4/2	灰黄褐色	シルト	礫(５～20mm)、焼土粒を含む。
2	10ＹＲ2/2	黒 褐 色	粘土質シルト	地山崩壊粒、焼土粒、炭化物を含む。

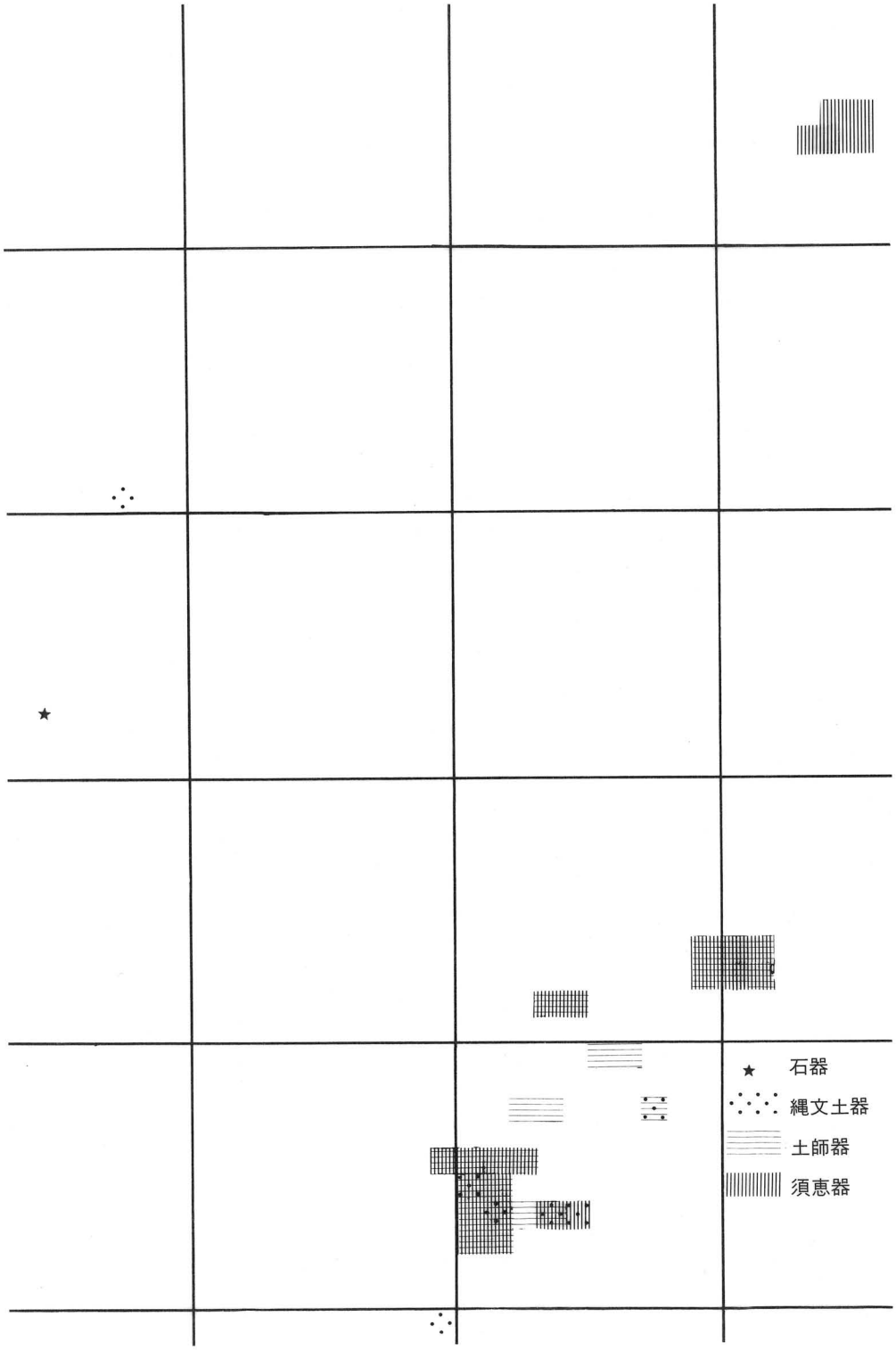
第13図　Ｄ区検出遺構



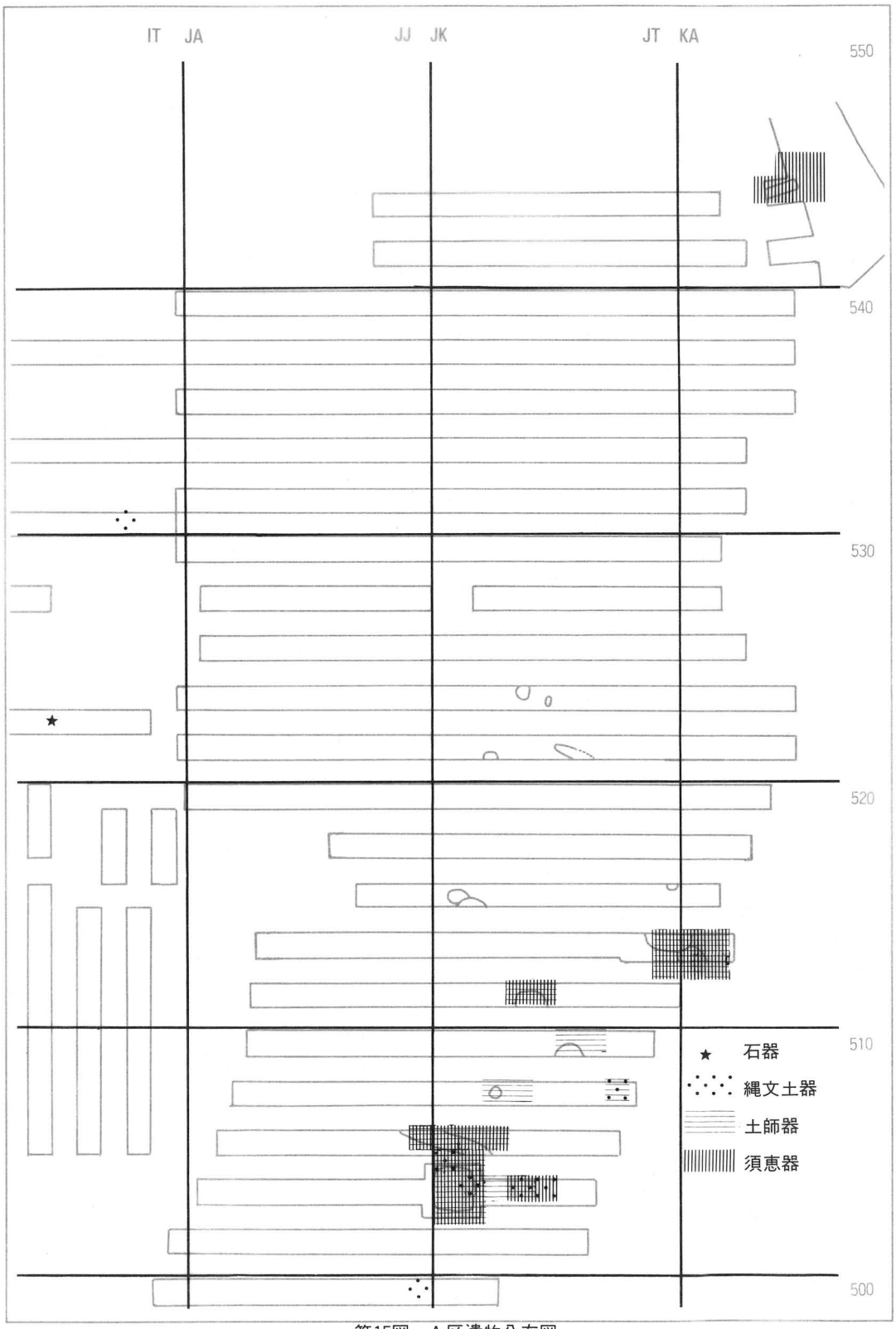
第14図　Ｄ区出土遺物



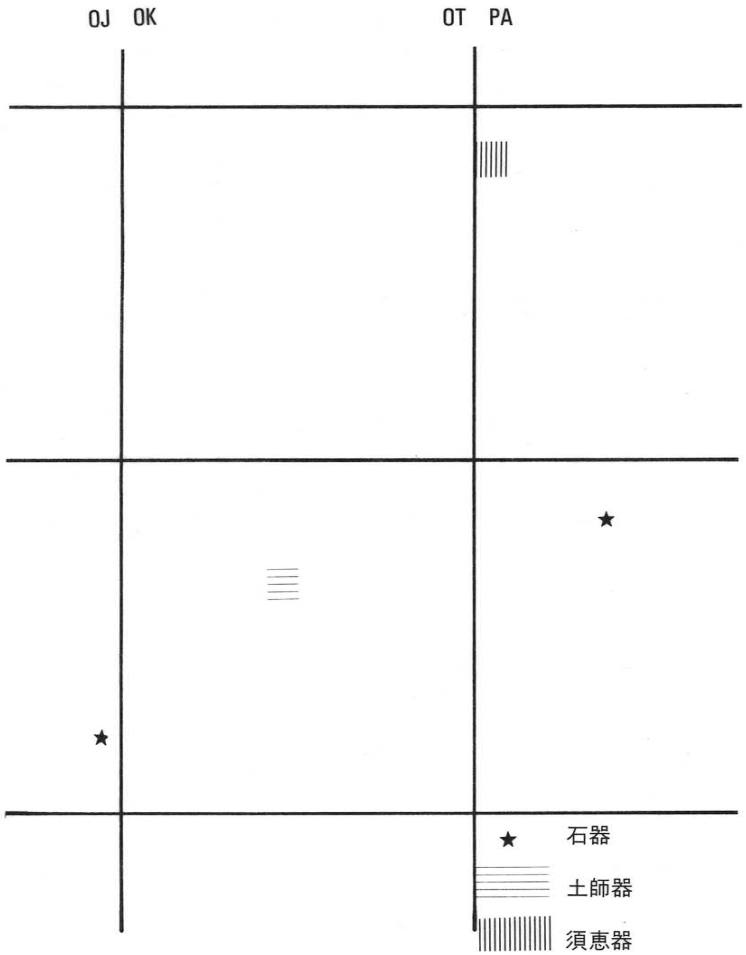
第15図　A 区遺物分布図

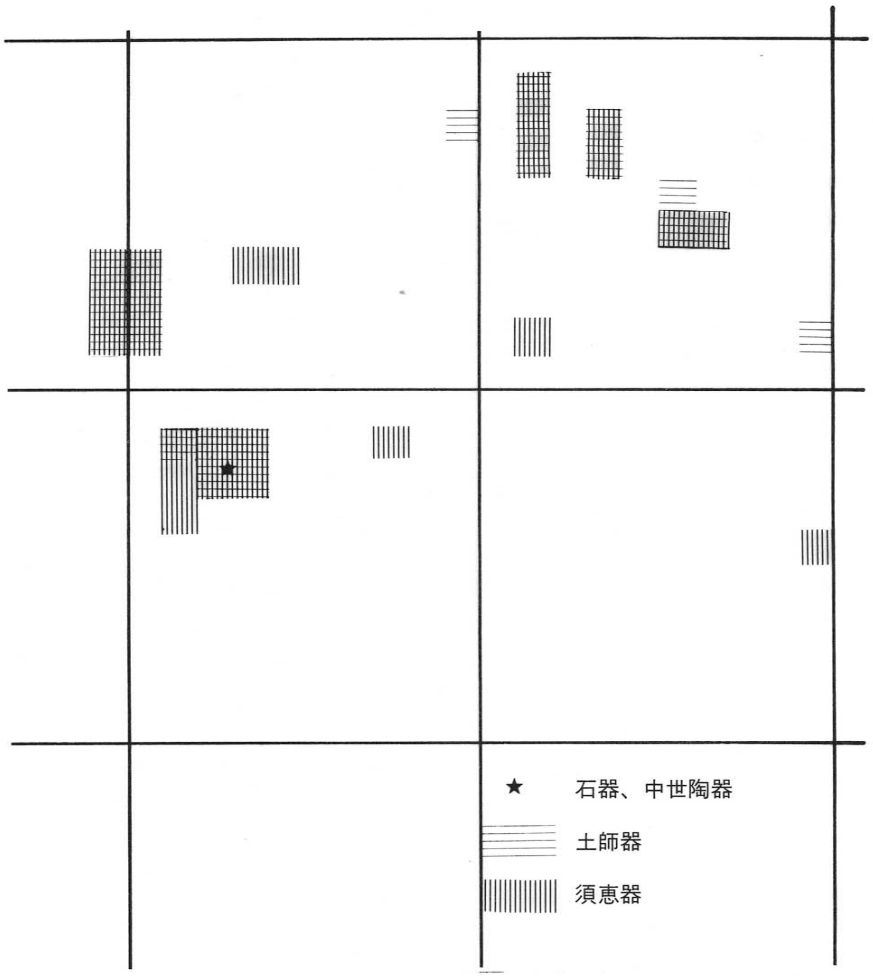


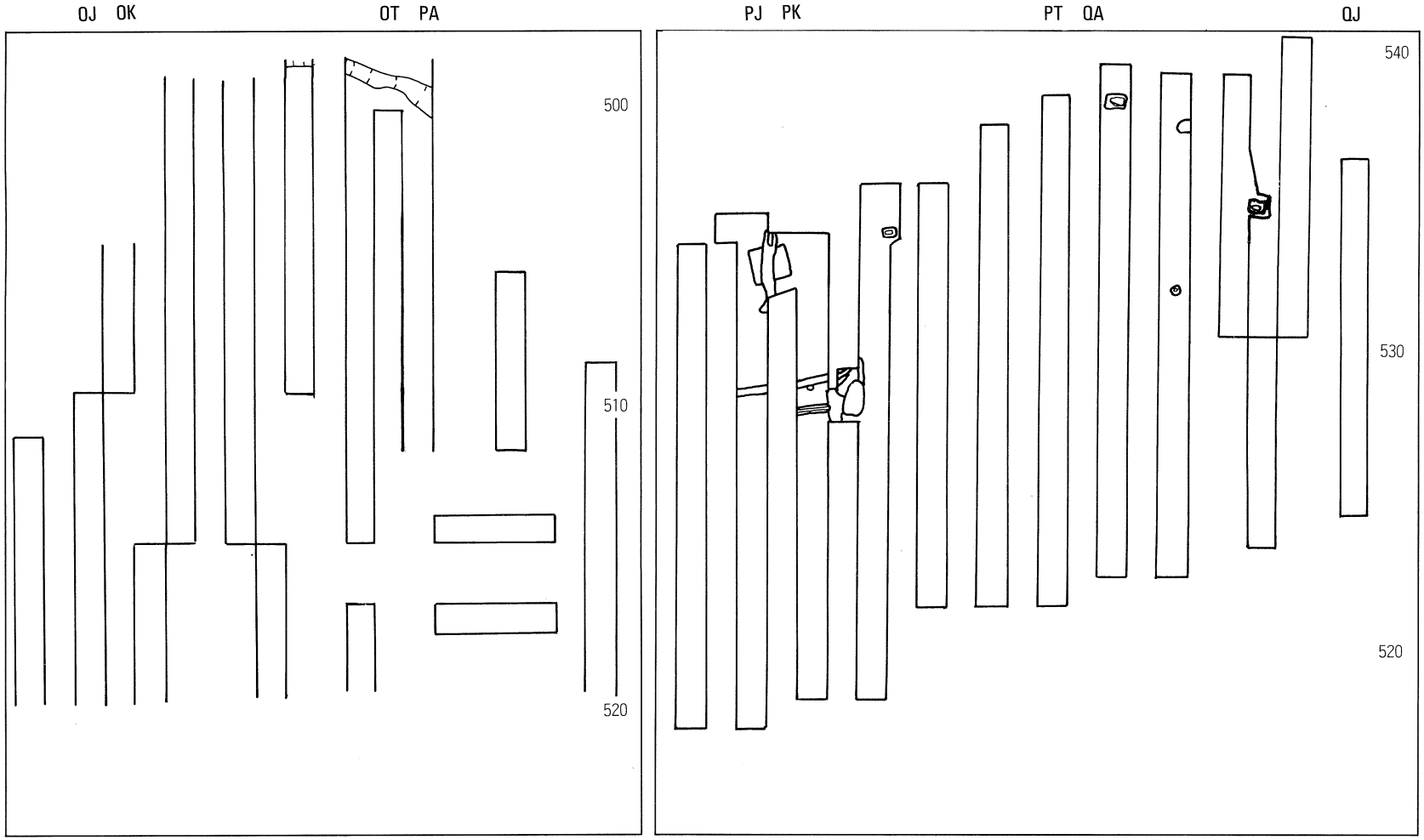
第15図　A 区遺物分布図



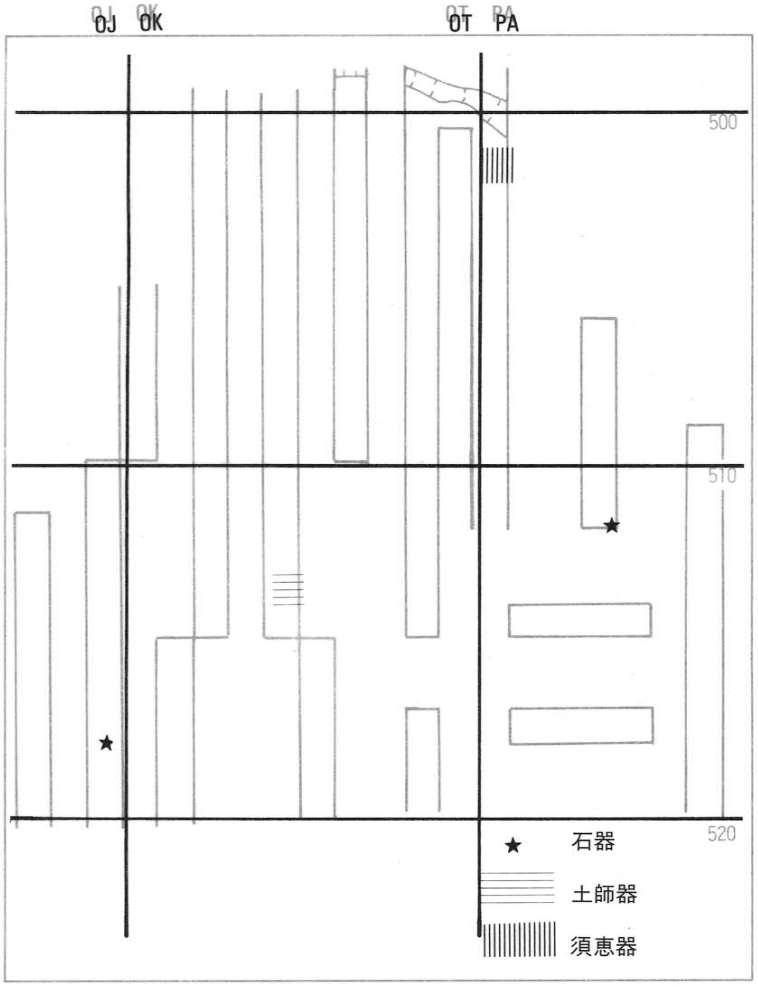
第15図　A区遺物分布図


OJ OK
OT PA
石器
土師器
須恵器

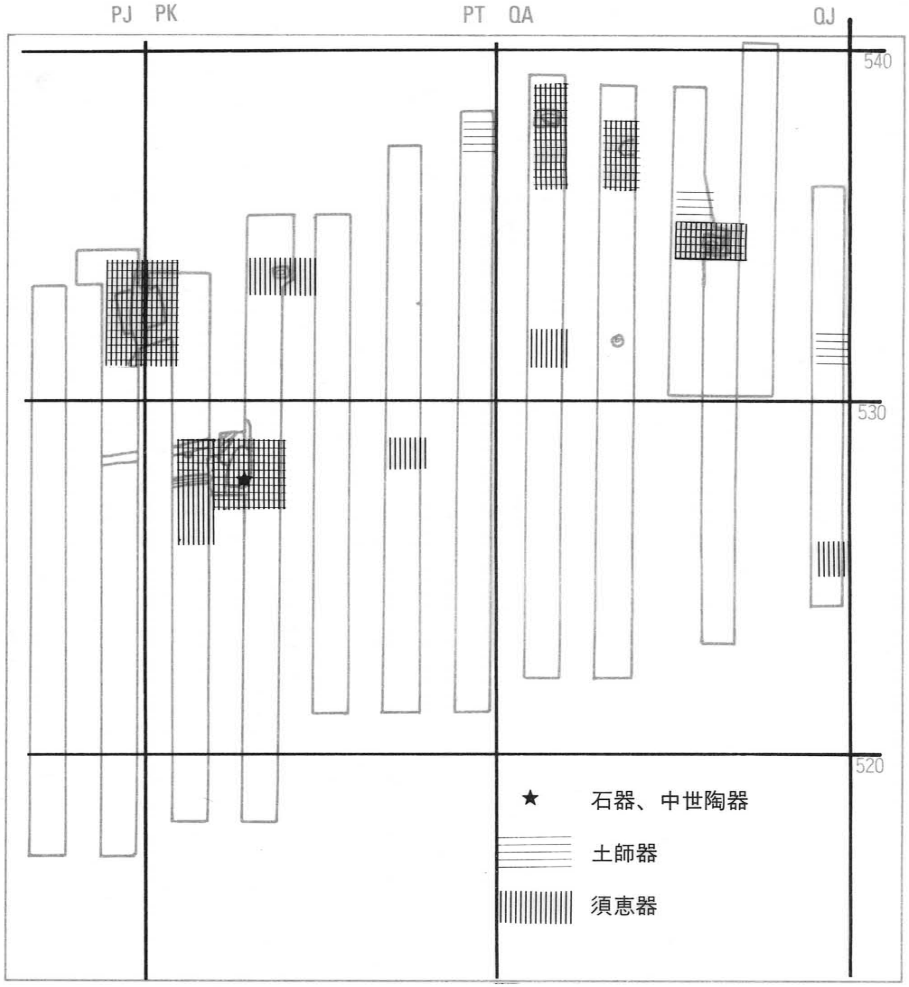

石器、中世陶器
土師器
須恵器



D 区　　第16図　C区・D区遺物分布図　　C 区



D 区



C 区

第16図 C区・D区遺物分布図

Ⅵ．ま　と　め

今回の調査で確認されたことを要約すると次のようになる。

(1)Ａ区……遺構は頂部と東側斜面から発見され、南東斜面には遺構のまとまりがみられる。遺物は石器、縄文前期の土器、土師器、須恵器が出土しているが、遺構との係わりのあるものは、土師器と須恵器であろうと考えられる。ＩＦ以西、546 以北では遺構及び遺物は発見されなかった。

(2)Ｃ区……遺構の大部分は北側緩斜面にまとまる。遺物も二、三の例外を除いては、遺構のある地点にまとまる。ＱＨ以東、509以南では遺構及び遺物は発見されなかった。

(3)Ｄ区……ＳＤ－１は旧沢跡と考えられるため、人為的な掘り込みは第１号焼土遺構だけである。また、遺物も僅かしか出土していない。

以上、第15図～第18図を参照されたい。

今回の調査では、当初窯跡ほか住居跡等の遺構の発見が予想されたが、発掘面積に比し、かなり少ない。中でも、多くの窯跡の発見が予想されたが、今のところ外れている。また、これに対応して、遺物の出土量も少なく、遺構分布の範囲が明らかになってきた。来年度以降の詳細分布調査で資料を補充し、その中で関ノ入地区の性格について結論を出したい。

引用・参考文献（五十音順）

伊東信雄（1957）：「古代史」宮城県史第１巻

小山・竹原（1973）：「新版標準土色帖」

笠原・茂木（1985）：「石兜遺跡」宮城県文化財調査報告書第106集

河南町文化財保護委員会（1986）：「わがまち河南の文化財」

菅井・恵美（1987）：「愛島東部丘陵遺跡群詳細分布調査Ⅲ」名取市文化財調査報告書第18集

高橋・阿部（1987）：「須江糠塚遺跡」河南町文化財調査報告書第１集

松本彦七郎（1919－ａ）：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」人類学雑誌34の5

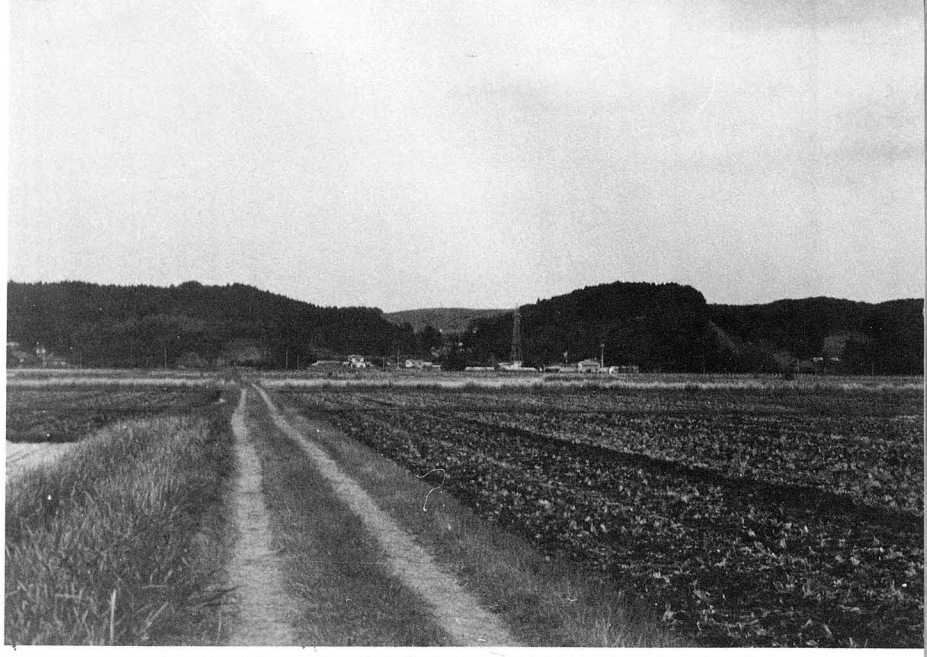
（1919－ｂ）：「宝ヶ峯遺跡について」考古学雑誌第９巻第９号

宮城県教育委員会（1976）：「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第46集

宮城県教育委員会（1981）：「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第74集

写　真　図　版

①関ノ入地区全景



②A区調査状況

③C区全景

④A区　1号住居確認面

⑤A区　11号焼土遺構
検出状況

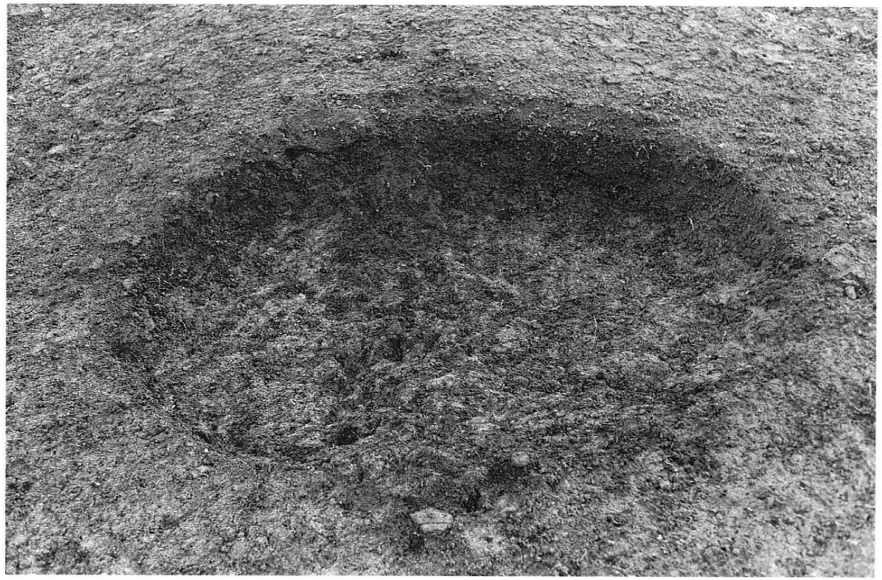
⑥A区　2号住居確認面

⑦A区　1号窯跡確認面

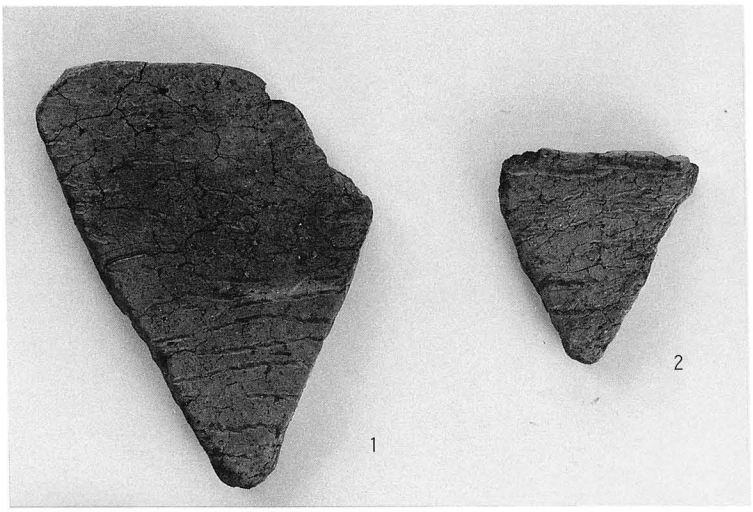
⑧C区　1号土壙検出状況

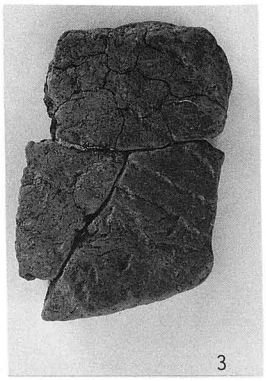
⑩C区　4号土壙検出状況

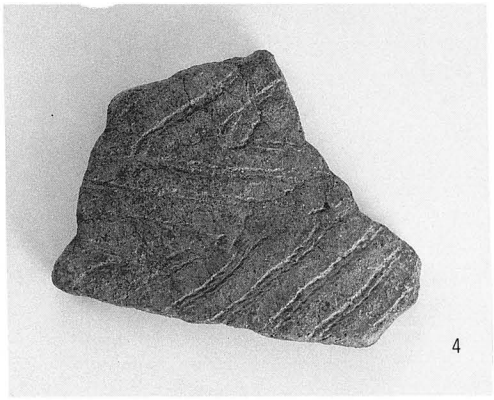
⑨C区　2号土壙検出状況

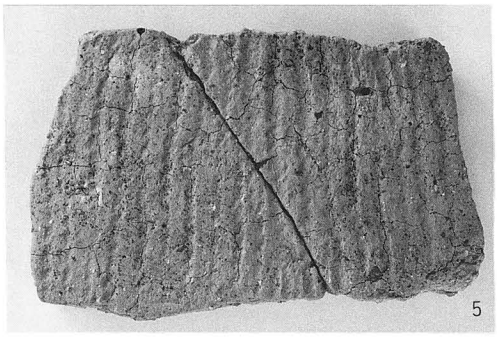


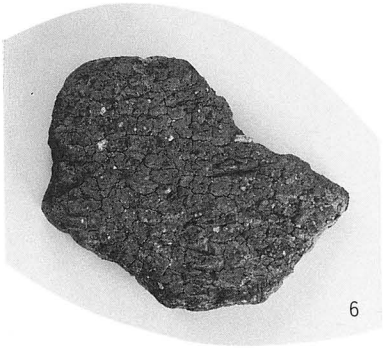
⑪C区　1号焼土遺構検出状況

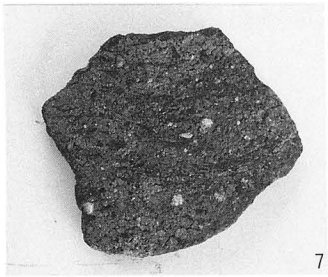


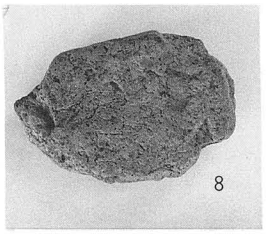


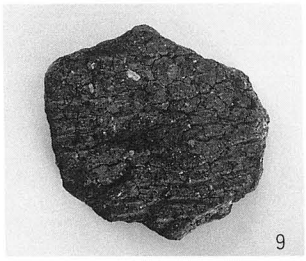






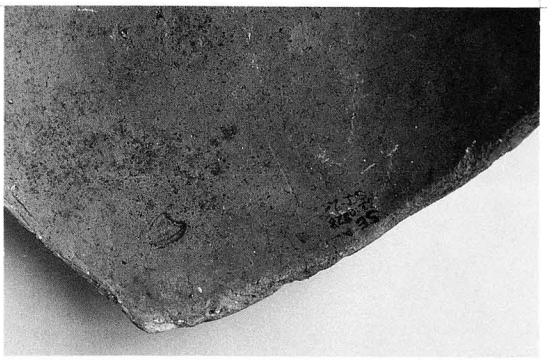






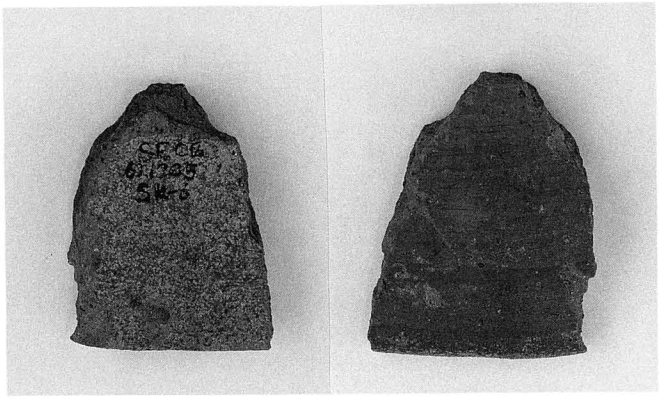
⑫A区 縄文土器片

⑬A区　2号住居
出土土師器坏

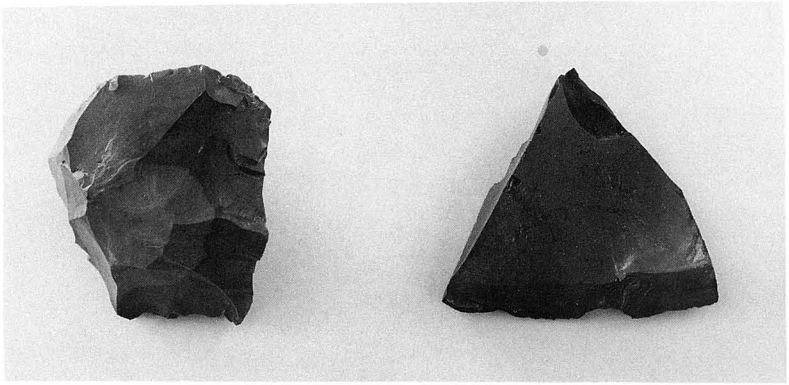


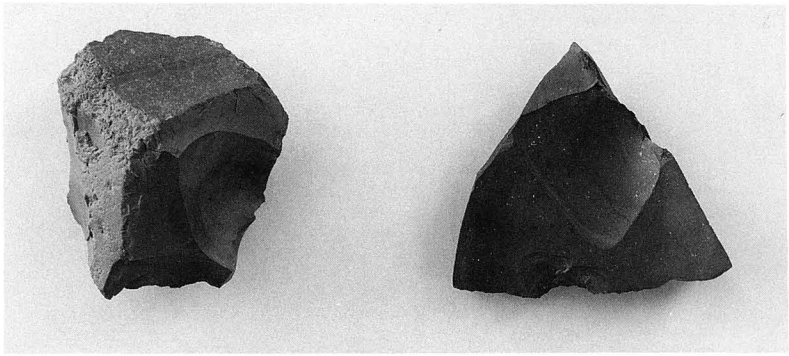
⑭A区　2号住居出土
土師器坏内籾痕

⑮C区　1号土壙出土
土師器底部

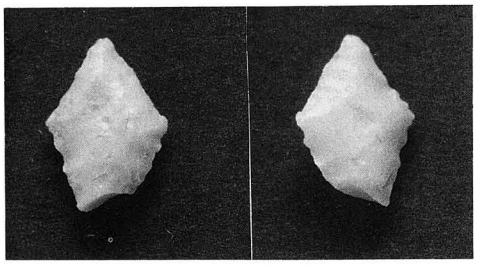


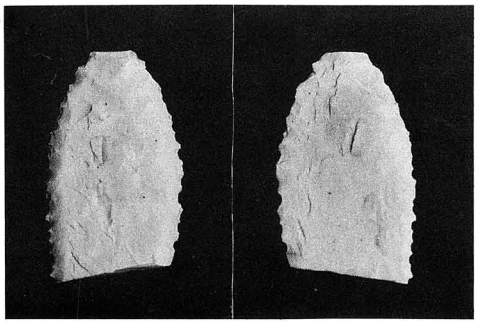
⑯C区　6号土壙出土
中世陶器片

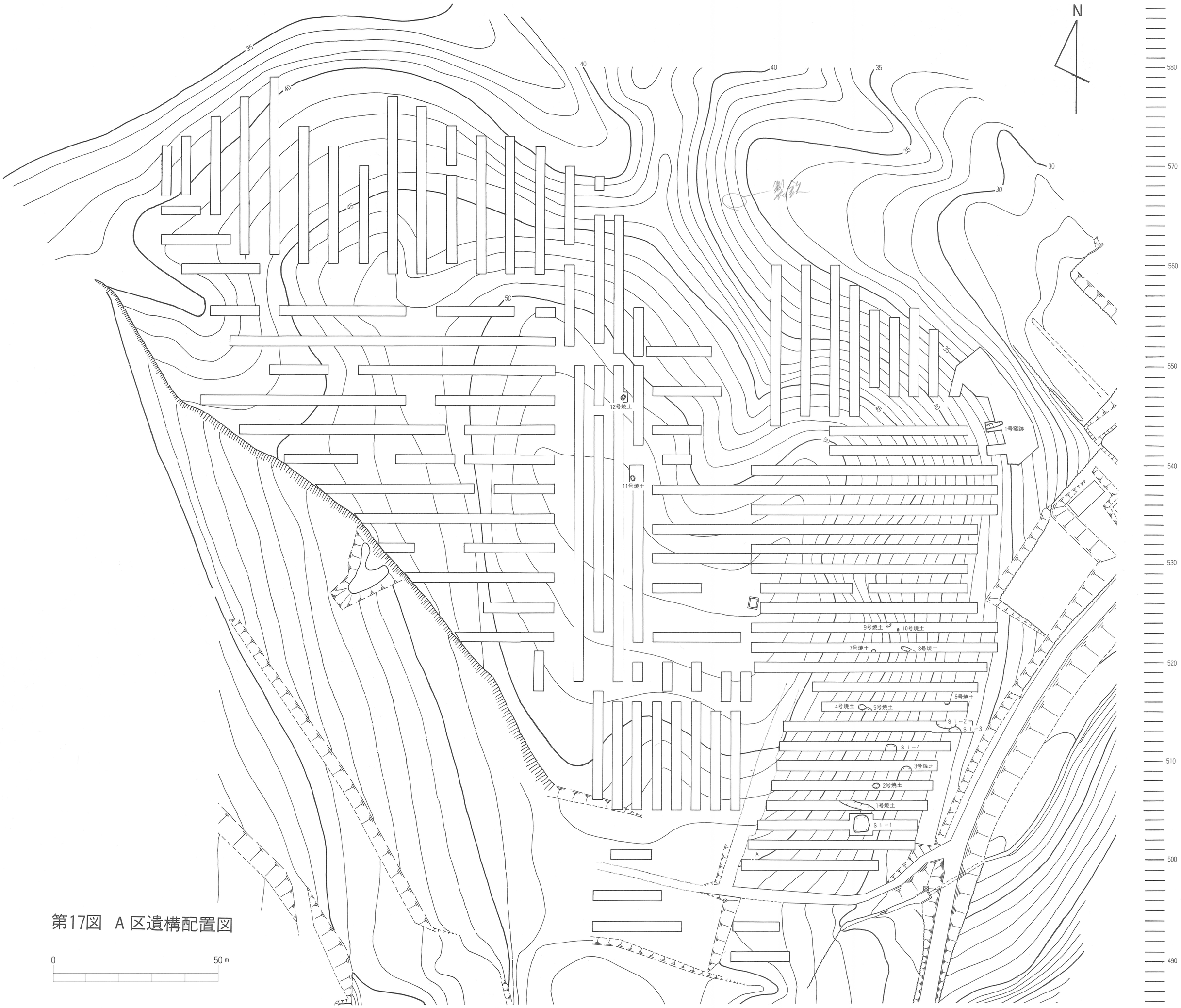




⑰関ノ入地区
出土石器

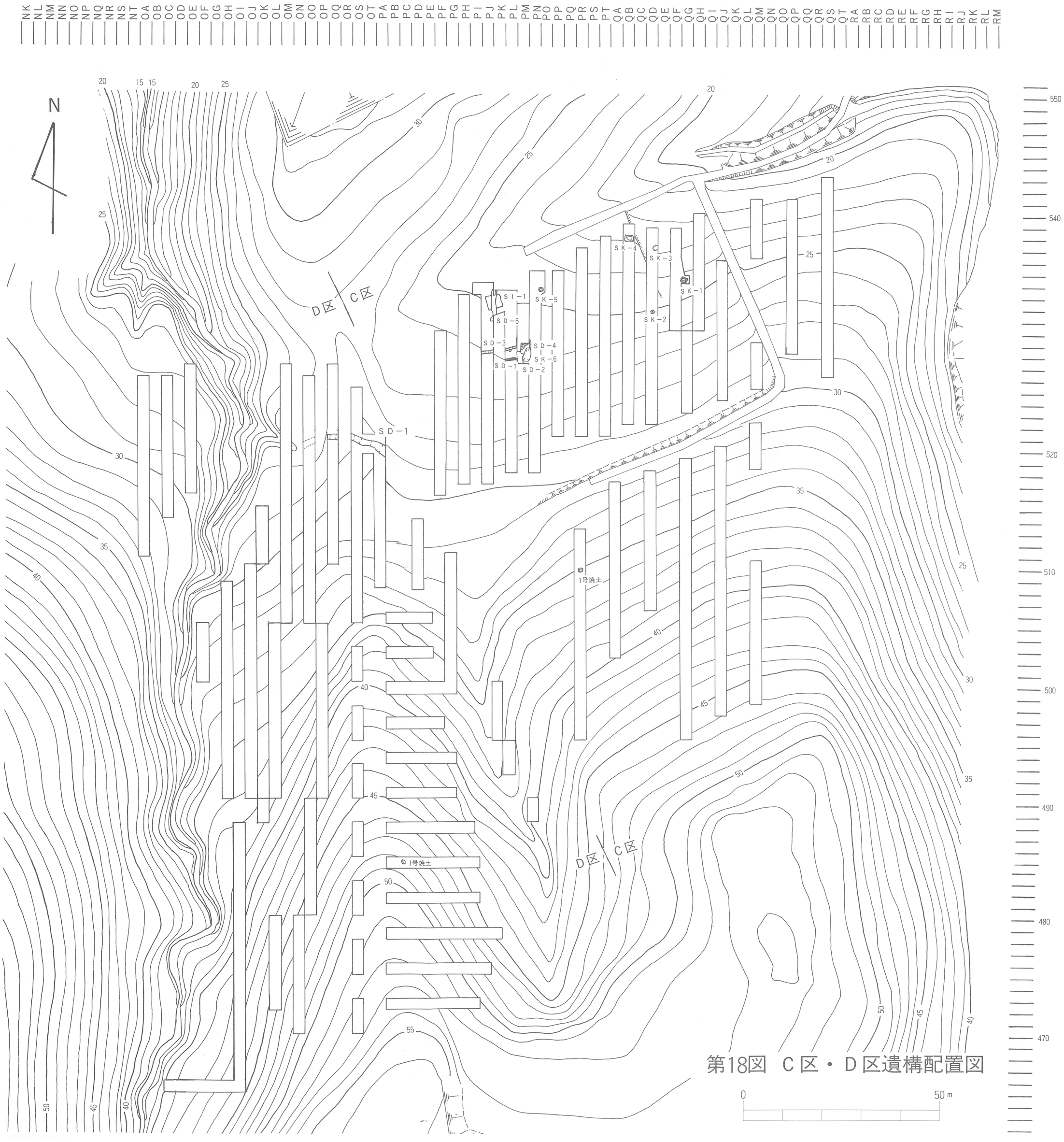






第17図　A 区遺構配置図

0　　50 m



第18図　C区・D区遺構配置図